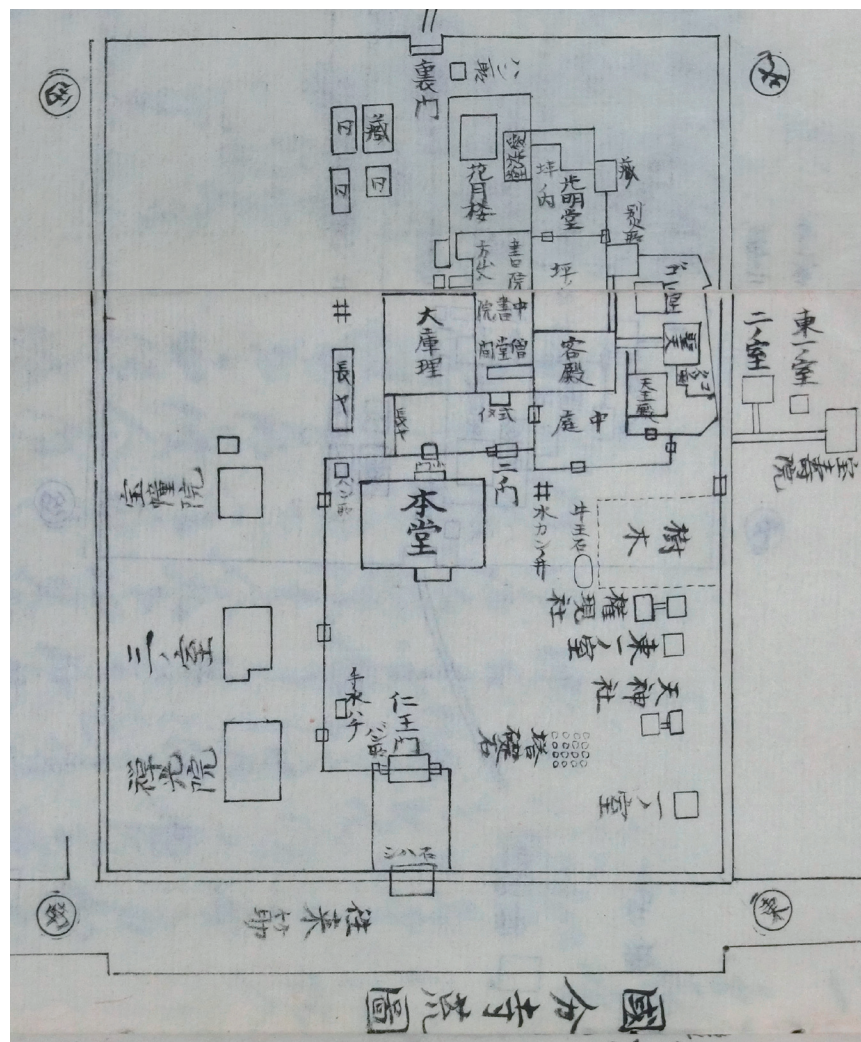


国分寺の建立



*旧藩別置記録 風土注進案12 7「東佐波令之下」

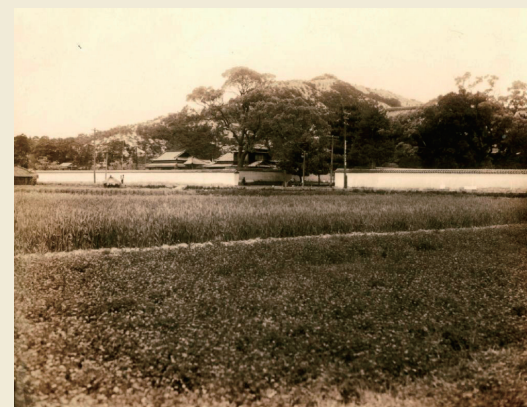
解説

8世紀の半ば、藤原広嗣の乱が起こるなど内政が乱れるとともに、天然痘が流行し多くの犠牲者が出ました。さらに、天候不順や凶作が打ち続く社会不安の中、聖武天皇は仏教の力で国を守ろうとしました（鎮護国家）。そのため国ごとに国分寺と国分尼寺を置き、都には大仏を作りました。

周防国分寺もこの時建てられた寺の一つで、写真は江戸時代後期に描かれた境内の図です。

現在の本堂は1779（安永8）年の再建ですが、平成の全解体修理に伴う発掘調査により、創建時と同一の基壇に建てられていることが確認されました。これは全国的にも珍しい例であるとされています。

また、国分寺にはそれぞれ七重の塔が建てられましたが、境内図には本堂の南東の方角に16個の礎石の跡が見えます。昭和28・29年度の発掘により、この位置に塔があったことが確認されました。



*写真上は、戦前に撮影された周防国分寺の遠景です。現在この付近は宅地化が進んでいますが、この写真から白い土堀に囲まれた寺域を見て取ることができます（県庁戦前内務部259「防府 国分寺全景写真」）。